

いきいき

VOL. 19号
平成21年3月3日
いわき市総合教育センター

■講演 「発達障がいの子の特性を生かした社会的自立」

(講師 大阪教育大学名誉教授 竹田 契一 氏)より No.4

■ 特別支援教育だより「いきいき」では、昨年末の16号からLD・ADHD等講座の講演の概要をお知らせしてきました。今回はそのまとめとして、周囲の存在とその関わりについて考えていきたいと思います。

1 カリスマティック・アダルトの存在

誰にでも言えることであるが、特に特別な支援を必要とする子どもには、「自分をよく理解してくれる人」や「大人になったらあのようになりたいと思わせるようなモデルとなる人」の存在（『カリスマティック・アダルト』）が必要だと言われる。カリスマティック・アダルトがその子どもの周りに一人でもいれば、感情が爆発しそうにな時でも、その人の顔が浮かび、自分の衝動的な行動にストップをかけることができると言われる。

2 特別な支援を必要とする子どもに対応する時の心得

- ① 行動の原因が環境要因だけと考えるのではなく、認知の偏りの可能性はないかという含みを持った観察をする。
- ② 一人一人の認知の特性（視覚優位か聴覚優位か、同時処理的か継時処理的か等）を踏まえた対応を考える。その際、WISC-Ⅲ等の個別の発達検査のデータは特性を把握する上で非常に有効である。
- ③ 特に「聞く力」の把握を丁寧にする。（例：同じ話の内容でも、一対一で聞く時と、集団の中で聞く時で理解の差に極端な違いはないか。）
- ④ 家族の養育態度や友人関係等を把握する。（例：保護者が子どもに頻繁に暴力を振るっていないか。友達との間に序列はないか。）
- ⑤ 本人の特性に応じるために有効と思われるいくつかの支援策を事前に考えておく。

3 養護教諭のかかわり

子どもが訴えてくる身体的な不調の中には、次のことも原因としている場合があるので、養護教諭のきめ細かな観察とサポートも大切となる。

- | | | |
|--------|--------|--------|
| ① いじめ | ② 虐待 | ③ 学力不振 |
| ④ 友達不在 | ⑤ 自己否定 | |



4 家庭への支援

軽度の発達障がいのある子どもを育てている保護者は、乳幼児期から育てにくさを感じていたり、周囲から育て方が悪いと責められていると感じたりして、子育てに自信を失い、孤立している場合が多い。このような保護者には一緒に考えてくれる相談者が必要である。保護者の心にゆとりが生まれてくると、子育てにイライラすることが少なくなり、子どもも情緒的な安定が見られてくる。

学習面で注意力に欠ける子どもには、家庭で予習をさせてもらおうと授業に集中できる時間が増え、効果的である。保護者に早めに学習内容や準備物等を知らせ、協力を得やすくしておくといよい。

このような手だてのもとで実際に子どもの行動に変化が起きるならば、保護者は見通しが持てるようになり、子育てに自信を持てるようになる。

「いきいき」についてご意見、ご質問等があれば総合教育センター松崎（E-mail matsuzaki-n@city.iwaki.fukushima.jp）までご連絡ください。